

文語歌曲「蝶々」

『小學唱歌集』明治十四年

谷田貝常夫

一、(野村秋足作詞)

蝶々 蝶々 菜の葉に止れ／菜の葉に飽たら 櫻に遊べ
櫻の花の 榮ゆる御代に／止れや遊べ 遊べや止れ

この「蝶々」の歌、日本人なれば子供の頃、いつとは知らず聞き覚えし、懐かしき歌ならむ。明治になりて小學唱歌にとりいれられたるも、歌詞そのものは、多少の異動はあれど江戸時代にすでに童謡として全国的に歌はれたるものといふ。とはいへ、さほど古き童謡にはあらざること、與謝蕪村の句「菜の花や月は東に日は西に」からも伺はる。「菜の葉」とある「菜の花」は照明用の油として江戸中期に全国的に栽培されたるものなれば、歌に組込まれたるはその時代以後とさる。

維新にて「御一新」を遂げたる明治政府、早くも明治四年には文部省を設置し、翌年學制を發布、小學校の教科目の一つに読み書き、修身、體術と共に「唱歌」を組入れたり。「當分之ヲ缺ク」の但し書きは付したるものの、音樂の國民教化に果す役割の大なることを認識したる上のこと確かなり。この唱歌教育實施のため政府は伊澤修二なる人物を米國に派遣、下調べをさす。歸國後伊澤修二、紆餘曲折はありたれど、二十代にもかかはらず愛知師範學校の校長に任命されたり。その任期中に、はるか年長なりし國學者の部下、野村秋足に童謡の蒐集を命じたり。そのうちに名古屋地方にて歌はれをりし「蝶々」含まる。

官僚としては優秀なれど音樂には通じてをらぬ伊澤修二の、米國にて師事したるは宣教師の「・≡・メーソン」なり。半音階なるものあるに戸惑ひたる程なりし伊澤は、しかしメーソンのもと、懸命に音樂を學ぶ。歸國後今度はメーソンを日本に招き、いよいよ共に懸案なりし「小學唱歌集」作りにあたる。方針として、「樂譜」をつけることとし、そのため冒頭に「音階」および「五線譜の読み方」にかかはる圖を置けり。國語における文法同等の規範なり。或る時メーソン、五線譜に代る掛け圖の中にある圖を置きて、これに日本語の歌詞を付たれば如何と問ひかけたり。その曲、獨逸の古き童謡なりし。後に「填詩」と呼ばる、この作業は、「小學唱歌集」の基本方針となりたるものにして、歐米の民謡なり讚美歌なりに、元の外國語によらず、日本語の歌詞をつけることとしたり。メーソンの問ひかけに伊澤の思付きたるが、野村秋足の採集せる「蝶々」にて、獨逸の古民謡の旋律にまことによく當てはまりたり。かくて今にいたるまで愛唱せらるる唱歌誕生す。

聲樂家の藍川由美言へらく、「わが國の音樂教育が『唱歌』から始められたことは、好運だつたといつてよい。なぜなら、わが國では、傳統的に、純粹器樂よりも、歌や踊りを伴う音樂がさまざまな形で發達して來たからである。常に歌が主役だつたといつても過言ではない」と。日本では「替へ歌」が重要な役割を擔ひきたりといふ。この間の事情を「蝶々」に見るに、野村の採取せる愛知にては「蝶々とまれ菜の葉に止れ、菜の葉が枯れたら木の葉に止れ」にて、徳島や高知にては「蝶々かんこ 菜の葉へとまれ なん菜がいやなら 手んてにとまれ 手んてがいやなら かんこにとまれ」と歌はれたりといふ。(「かんこ」は、可愛い子の意)

明治の小學唱歌にては、先に載せたるごとく、蝶々の下半分を、「櫻の花の 榮ゆる御代に／止れや

遊べ 遊べや止れ」とされたり。後年の伊澤の説明は次の如く、愛國心、道徳心を養ふが目的なるを示す。

其意は我皇代の榮する有様を櫻花の爛漫たるに擬し聖恩に浴し太平を樂む人民を蝶の自由に舞ひつ止りつ遊べる様に比して童幼の心にも自ら國恩の深きを覺りて之に報ぜんとするの志氣を興起せしむるにある也。(伊沢修二「洋樂事始」)

唱歌集の體裁を整へんがためか、二番の歌を付したり。但し作詞者は別人なり。

二、(稻垣千穎作詞)

おきよ おきよ ねぐらの雀／朝日の光の さきこぬさきに

ねぐらをいでて 梢にとまり／あそべよ雀 うたへよ雀

更に加へられたるが次のごとき歌詞なり。

三、(明治29年1896年・作詞者不明)

蜻蛉^{とんぼ} 蜻蛉 こちきて生まれ／垣根の秋草 いまこそ盛り

さかりの萩に 羽うち休め／生まれや生まれ 休めや休め

四、(三番に同じ)

燕 燕 飛びこよ燕／古巢を忘れず 今年もここに

かへりし心 なつかし嬉し／とびこよ燕 かへれや燕

(昭和22年1947 改作版)

ちようちようちようちよう 菜の葉にとまれ／菜の葉にあいたら 櫻にとまれ

櫻の花の 花から花へ／とまれよ遊べ 遊べよとまれ

大戦終結後、聯合國最高司令官總司令部 GHQ の皇室讚美を抑制せんとする意圖を付度し、文部省教科書の『一ねんせいのおんがく』にては、歌詞單純そのものに變更せらるると共に、二番以下も削除せらる。他の鳥なり昆蟲は主題を弱むと判断されたるか。

されど、「蝶々」にまつはるかかる改變以上に重要な變更は、唱歌となる以前の童謡は、落着きのある短調によるものなりしが、明かるき長調に代へられたることなり。伊澤修二、日本の過去の暗き音楽と訣別し、西洋音楽への志向を方針とせり。故に「小學唱歌集」の中に短調は一曲のみとなれりと聞く。歌詞は母語との方針に背反するにあらずや。

「蝶」なる漢字には訓は無く、*dhiep* なる隋唐の發音、「てふ」から「てふ」と表記されたり。字源からするに「虫十葉」よりなる字にて、葉のごとく薄く軽く飛ぶ蟲なれば、短調のもののはかなきに調子こそ整合するにあらずや。音楽界の現状は大半の演奏が西洋音楽なり。明治にて代へられたる日本の姿、今に色濃く残るを如何せむ。

(平成二十九年一月二十四日受附)